

≡ 文化財だより

第 26 号

平成25年 3月

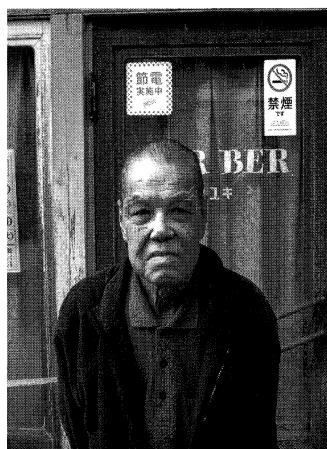
発行 真鶴町教育委員会

集 真鶴の明治・大正・昭和 特 セピアに霞む生活を尋ねて

熱海線真鶴停車場開通記念

真鶴古図を眺めて

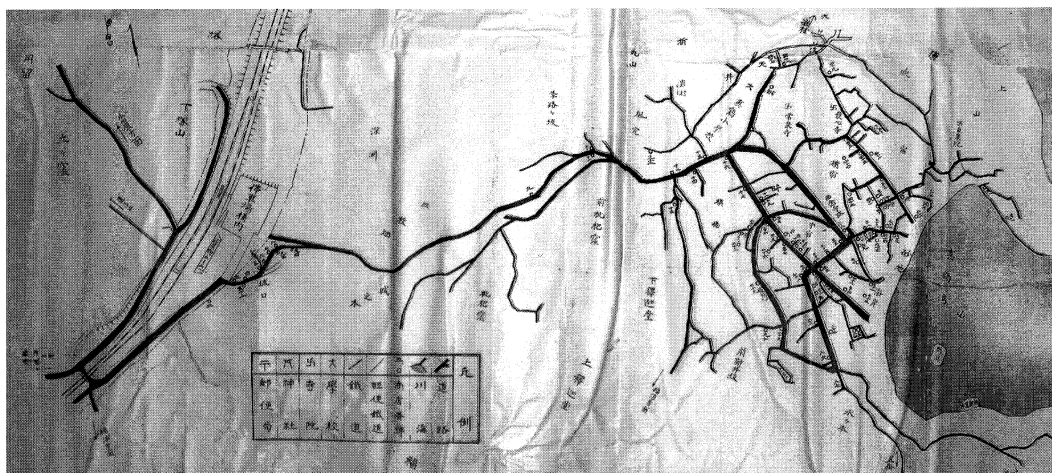
露 木 良 彦



「おや、一寸今の街並みと比べて、
おかしいぞ」と思いました。

「駅の小田原よりに道がない。家
屋がなく空欄だ。岬道が欠けてい
る。港へ抜ける県道が違うようだ。
あ、港の中に島がある。……………」

「捜せば色々出て来そうですね。
其れも其の筈。大正十一年十二月
二十一日に今まで人車鉄道から軽
便鉄道で人を乗せた小さな汽車が、
東海道線の延長として計画された
熱海線となり真鶴迄延び開通した
時の地図だからです。」



大正十一年真鶴村地図

目 次

特集

真鶴 明治 大正 昭和

セピアに霞む生活を尋ねて

露 木 良 彦

熱海線真鶴停車場開通記念

真鶴古図を眺めて…………… 1

関東大震災と津波の話…………… 2

新井坂での石転がし…………… 3

宝性院跡…………… 3

船霊(船玉)・竜神祭り…………… 4

水源地掘削と
コレラ、チフス…………… 4

真鶴町教育委員会

真鶴小学校の

移り変わりと世相の中を

生き抜いた事象…………… 5

文化財審議委員活動報告…………… 8

この時

(一)心にとめよ 大正は

十一年の 暮の月

三十一日のあさばらけ

ひびく汽笛の その音をば

(二)文化のあゆみ いとおそき

われらの村の入口に

さけぶ天使の 声を聞け

汽車よ文化を 積み来たれ

(三)略

旗行列に参加した当時の人々は楽隊のひびきに合わせ大きな声で歌い喜んでさうです。

それも束の間、翌十二年九月一日御存じの関東大震災。真鶴地域の震災復興活動は、道路の整備、改修を中心とした土地の整理と住宅建設を柱として進められました。これらの整備改修には真鶴にあっても御多分にもれず、計画立案、実施方法など思いがけない問題が待っていました。

そのうえ大正十三年一月十五日には、余震があり仮設住宅が破壊され、翌年八月二十八日には、豪雨により大きな被害に見舞われてしまいました。

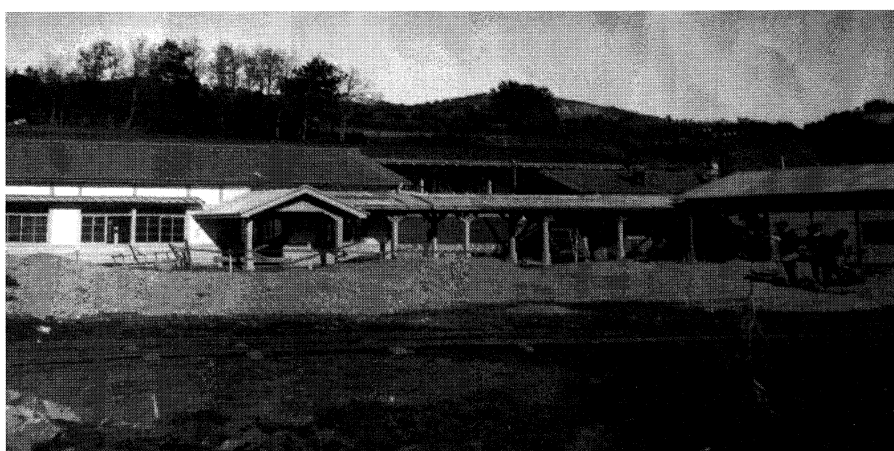
しかし、大正十四年末迄には、7.2m巾の真鶴停車場線が港まで新設開通しました。この工事は特に真鶴橋下を約9mも掘り下げる難工事だったそうです。

震災後復旧に全力を尽した町民は自然災害への備えは怠りませんでした。しかし、昭和五年十一月二十六日、俗に相豆地震と言われている、北伊豆地震が発生しました。人的な被害は報告されていませんが、真鶴町では、全半潰等十六軒、石垣、道路等の破損七、八十か所、岩村でも住宅半潰破損一軒ずつ、石垣の破損十余か所が報告されています。

相豆地震は真鶴地域にとって関東

大震災後の復旧が一段落した時に生じた災害で、多大な費用を捻出し道路の改修に当たったわけです。

さて、真鶴駅ロータリー前に立つて、地図を見ながら大正・昭和初期に想いを馳せ周囲を眺めるとセピア色に、色々な事柄が浮かび上がって来ました。



開通直前の真鶴駅舎

関東大震災と津波の話

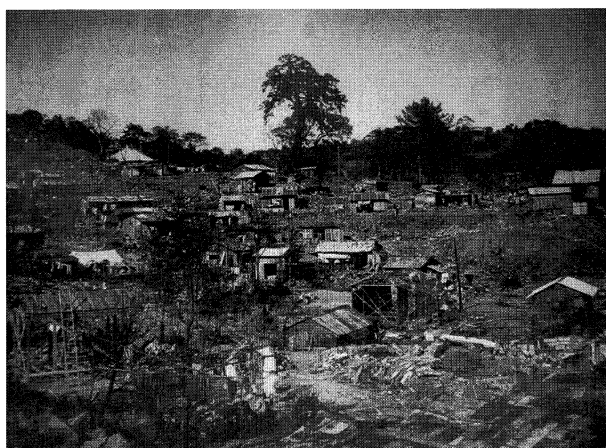
大正十二年九月一日

午前十一時五十八分四十四秒

今は亡き鮑屋の青木庄蔵さんが毎年の隣組の新年会や、貴船祭りの後の鉢はらいの時などに若い者たちに大地震の恐さを教えてくれました。

青木さんは、当時二十二歳で家業の海産物の売買を手伝っていました。その日も朝食を終え、籠を持ちベカ（小型の船）に乗り鵜島の沖に浮かべてある生け簀に着けて注文の鮑や蝦を籠に入れました。そして、ベカを洗いもう昼時で戻る支度をしていました。

すると突然水面がザワついてきて、

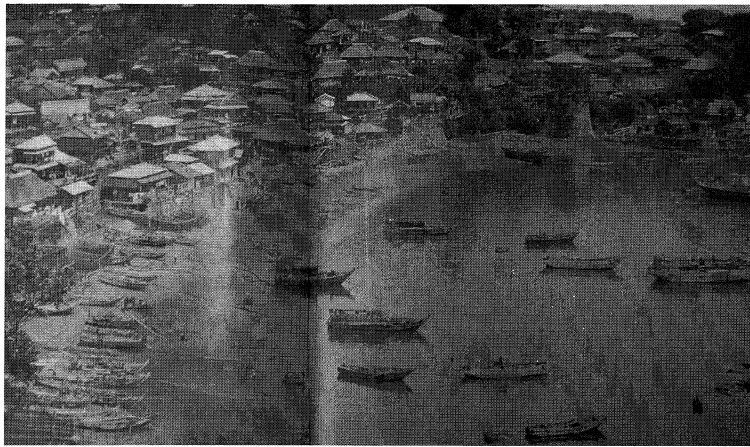


関東大震災直後の真鶴村



関東大震災により倒壊した家屋

これは地震だと考えている間に港の水がどんどん減り生け簀もベカも港口に流れて行き出しました。思いきって水溜まりが出来た海底を全力で走り鵜島の乾いた岩の上も走って小浜に飛び下りました。宮参りの道の竹藪に潜り込み竹藪を分け、宮渡橋の上の方に逃げて一息入っていたら沖から白波が盛り上がる様に押し込んで来ました。東雀島が白波に隠れました。さらに波は貴船神社前から鵜窟の天井部を落とし鵜島を一飲みにし、小浜を西から浚って舟上げ場を駆け上がりました。その後、波は砂浜を横走って小舟を道路の奥まで押し込んで引き、押し込んで引き



大正時代の真鶴港

と三回も続いたと青木さんは話してくれました。その夜に港口では、機帆船や漁船が相互に破壊し合いバリバリと凄いい音を立てて流されていたと云います。また、遠く岩村の赤馬の空が赤い土が崩れて舞い上がったのか赤く染まっていたと云います。私（筆者）の父の話では、鱗屋さんでは玄関や座敷まで小舟が突き刺さっていたと云います。大店の瞬間の家の家では石段の上の方まで波が来たと云い、青木あさのさん宅では玄関の下石垣まで波が来たと云います。



西の道祖神

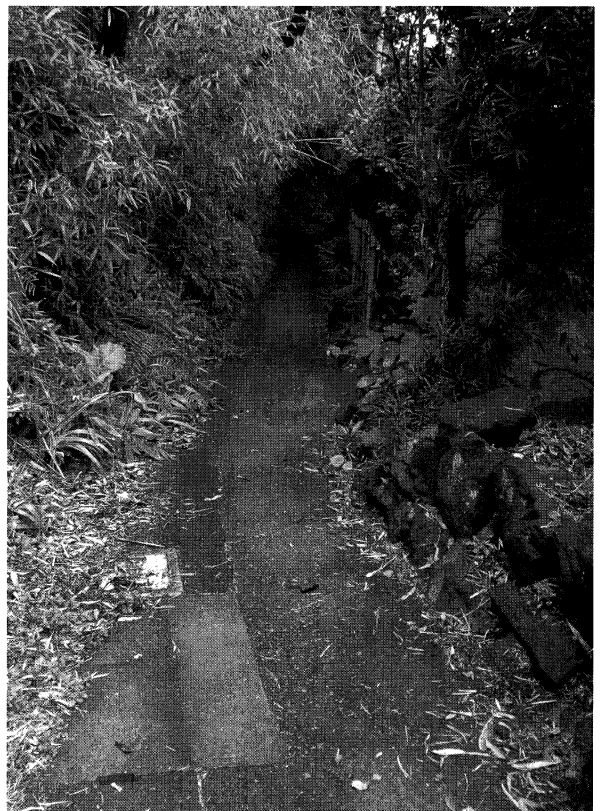
新井坂での石転がし

新井坂の基点となる西の道祖神の石像の前に子どもの頭くらいの大さの玉石が幾つか安置してありました。何に使う石か判らなかつたのですが、近所の子ども達は、時折気が合うとてんでに一個ずつ抱えては、新井坂の上の方まで運んで行き、坂の上から順々に石転がしの競争をして遊んで居り、誰が一番上手に転がせたか？を決めていました。遊びに飽きると又、元の場所に石を返して別の遊び場所に移って行くとのことでありました。

大人たちは雨水の流れる側溝もない山道なので道の中心の水路造りと、道祖神の石で道路を浄めてくれたので咎める事もなかつたと云います。今はその石も見当たらず、道路の改修の際にアスファルトの下にでも埋められてしまったのではないだろうか？と淋しそうに話してくれました。

子ども頃は新井坂を毎日上り降りして学校へ通い、家に帰ってからのお手伝いや、幼い子ども達の子守等に明け暮れていました。道祖神の近所に住む子ども達の石を抱える小さな手と、祭り太鼓を叩く小さな手とが、祈りの手とダブって映り、消えません。

真鶴町の西の道祖神の前の高い石垣に囲まれた土地で、現在は（チビツ子広場）と呼ばれています。戦前から鄙びた堂宇が建ち、一寸立ち寄り難い感じの本堂は扉や障子が閉まっていた人の出入りもない様子でした。或る時、近所の富岡ヒデさんに尋ねてみたら、「私もはつきりした事は判らないけれど」といいながら、「京都の東寺の末寺である」との事でした。また、「真言密教の名刹で護摩壇には不動明王を祀っており、堂内の格天井は極彩色の花鳥風月が画かれていたと云うことで頼んで見させてもらいましたが……。」と話



新井坂

宝性院跡

してくれました。

宝性院は、大正七年の西浜の大火事の類焼と、大正十二年の関東大震災の時の類焼と二度の大火に本堂だけは焼け残ったので米神の正寿院に預けられ、戦後になって平成の声を聞いてから廃寺となり解体されました。



宝性院石垣と新井坂

船霊(船玉)・竜神祭り

ふなたま

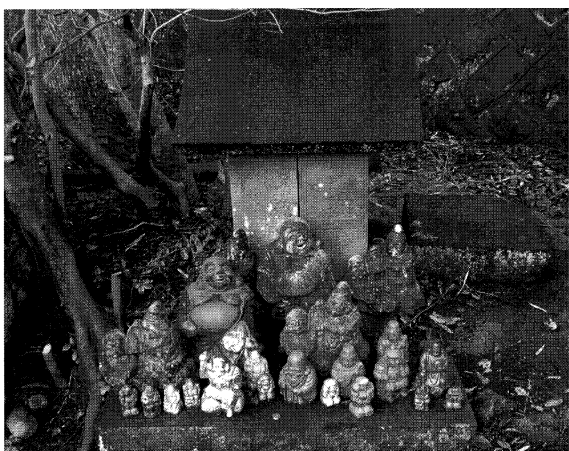
大正時代の中期に被った大火と大震災に町民も打ち拉げられる程の大打撃を受けて、不景気のどん底に喘ぎ借金に苦しむ世情の中で漁業と石材業、海上と陸上の輸送の流通路の発展に力を得て、港町として発展していき

ました。
その反面、山は削られ、砂浜や磯は

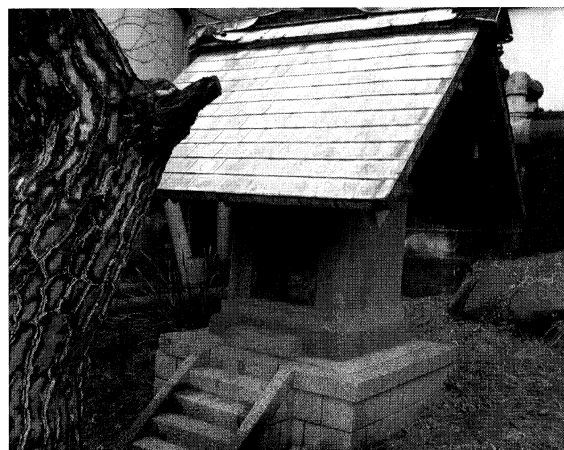
埋められて、自然の景観は新しい堤防

と岸壁に固められていました。利便さが優先の近代的な港に変わって、経済本位な町筋と町並みに変わっていきました。大正後期から貴船神社の参詣路は、大日本製氷社が製氷工場を建てるためと築港のために愛宕神社の裏の水ヶ本の山の上を崖下の小浜に落として磯から砂浜までトロッコで運び埋め立てて工事を進めていました。昭和九年四月まで貴船神社の大きい行事は「宝性院」の庭で施行されました。

五月三日に漁民の船霊(船玉)竜神の祭り「竜宮さん」が行われ、宝性院の境内には、直径四尺近くもある大釜が据えられ、その下で太い薪が勢いよく燃やされて釜いっぱいのお湯は沸騰して煮えたぎっていました。



八大龍神



水源地 水神さん

参詣の善男善女は子どもを交えて続々と狭い境内いっぱいに詰めかけました。

貴船神社の宮司、平井大海さんによる大漁祈願と漁労安全の祝詞が奉じ上されました。代表者達が玉串を捧げ漁民達の参拝が終わると、宮司は両手に余る笹の束を奉持して、大釜に向かいました。何やら呪文を唱えたかと思うと笹の葉の束を大釜の熱湯の中に入れ、引き出すと共に、群集の頭上に湯玉の雨を降らせました。子ども達が、どよめいて右往左往する中、宮司は釜の廻りを一巡しながら四方に湯かけをしました。この湯滴を浴びると、一年間の無病息災が得られると云われていました。因みに石船(石材運搬船)の船霊

(船玉)さんは貴船神社の船霊(船玉)竜神社に祀ってあります。現在は漁船の船霊(船玉)さんも同社に合祀してあつて神社内で祈禱して護符を授かるとの事です。

水源地掘削とコレラ、チフス

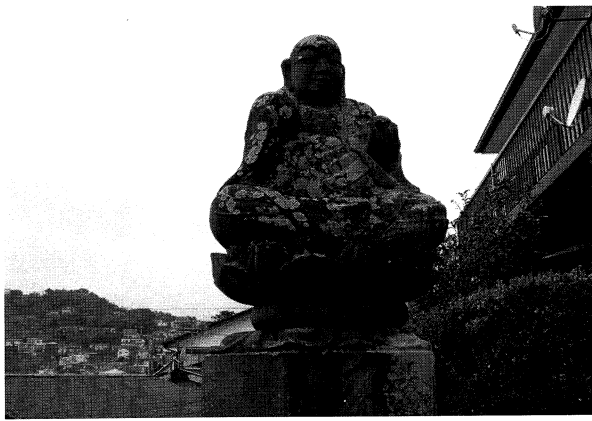
昔から真鶴の町中に住居を構えて永住する人々は何処の家でも家屋を建てる前に必ず井戸を掘って生活の基本原則である水を求めていました。地下水の豊富な土地柄ではなく、夏の日照りが続くと、何処の家でも小屋の片隅に掛けてある天秤棒と慈水桶を出して来て、水が豊富にある家に貰いに行くのが、子ども達の仕事でした。



今はつかわれない 磯崎水源

それも井戸水とは云え、塩分の少し混ざった水でした。まして水道水ともなれば水源が東の海岸の天神堂の下に湧く、霊泉「弘法の井」の湧水でした。潮の満ち引きで塩分の濃度が少し変わりますが、容認して貰って永い年月使用して馴れて来た水でありました。

大正元年に真鶴村にコレラ病が発生、さらに大正五年には再び真鶴村でコレラ病が発生し、真鶴・福浦・岩・三村共同で隔離病舎を設置しました。大正十年には再々のコレラ病発生に水不足の為の不衛生が問題視されました。また、大正十二年の関東大震災には水不足で家の回りの土を掘って消火したと云います。



避病院でコレラ・チフスにより亡くなられた
方々の供養を含めた地藏尊

昭和三年にやっと県の認可が下りて、井戸の掘削、釈迦堂山へ貯水池の制作、送水等の大事業が完成しました。

昭和九年十月に岩村内に腸チフス病が発生、更に昭和十年七月に真鶴町・福浦村に腸チフス発生するも小学校で手洗いを励行したので完全に快復しました。

真鶴小学校の移り変わりと 世相の中を生き抜いた事象

ここに書かれた文章は、真鶴小学校開校百周年記念誌のⅡ開校百年の歩みの抜粋と概略です。

本文をご覧になりたい方は、教育委員会へお問い合わせ下さい。

1 創立、常泉寺時代

(明治六年～十四年)

明治六年、学生発布により、「岩村」と連合して、真鶴校と称え、常泉寺を校舎として開校しました。住職の福岡範平が教員となり、校内四ヶ寺の住職が交代で教授に当った。

2 村立真鶴学校時代

(明治十五年～二十六年)

岩村と分離し、現在の場所真鶴町

字天井の池に板ぶき平屋建て六教室の校舎を新築する。明治二十六年一月二十六日、明治天皇、昭憲皇太后の御真影を賜り職員児童役員、村民多数城口まで出迎え、奉安する。

3 尋常高等真鶴小学校時代

(明治二十七年～大正十一年)

高等科を併設し、岩・福浦両村の児童も高等科に収容した。明治三十一年十一月七日新校舎落成、この日を本校の開校記念日と定めた。校舎は二階建て十教室で階下八教室、階上は裁縫室と唱歌室の二教室に当てました。

明治四十一年当時児童数は三百余名、高等科女児卒業生は数名でした。

◎明治時代の思い出

平井 ミネ

・学級の人数は、二十人位で男女一緒の組でしたが、並んで座ることは、ありませんでした。

・服装は、みんな着物で式の時は袴を着け、はき物は草履がほとんどで、あき裏草履・わら草履で、わら草履は家で作りました。

・勉強は読本や修身、九時から十二時頃までだったと思います。

そのほか運動会・遠足・遊びのことなど色々と書かれています。

◎明治・大正の思い出

高橋眞太郎(大正三年高卒)・高橋イネご夫妻

・一学級の児童数

男女一緒三十人くらい

・当時の学校行事では、大きな行事は、毎年、日が決まっていました。

四月十七日の山遊びは石の神様と関係がありました。十一月三日は天長節で運動会、着るものは特別注文で、早川口の呉服屋さんが来ました。

等々色々な事が述べられています。又、今の学校と違う点として、席順・兵式体操・井戸からの水運び・椎木に登って木影で読書………当時を彷彿とさせる言葉で綴られています。



関東大震災前の校舎 南側全景

4 真鶴尋常高等小学校時代

(大正十二年〜昭和十五年)

○バラックの仮校舎を建築、教室十付
属建物は使丁室、宿直室共通の一棟。

○大正十五年 校地が三段になって
いたが一平面にする。難工事のため、
村当局・在郷軍人分会・青年
会の尽力により実施された。

○昭和二年三月新校舎起工式を挙げ
る、日米親善の米国より人形（リ
ベッカー）の寄贈を受ける。

○十月 校舎講堂落成○十月十一日
校運隆昌新願のため伊勢神宮参拝、
大麻（お札のこと）を拝受し、奉
安する。十月十七日町制祝賀会及
び学校落成式を挙げる。昭和三年
二月御真影安置のための奉安所
を造る。五月二十九日町長並に校
長、東郷元帥宅に参上し揮毫の書
を拝受する。

十月二十日今上天皇陛下・皇后陛
下の御真影を賜る。即位式記念事
業として児童職員、卒業生有志の
助力と寄贈を受け、校旗一流を新
調、ピアノ一台を購入し披露式を
する。

◎先生の思い出

露木アサ子（昭和二年高卒）
前段階……一番印象の深い掬川先生



正面玄関

は福浦のお寺の住職で生徒を可愛が
る半面、とても厳格な先生でした。
関東大震災の時私達は五年生でした
が母や妹達と学校の近くまで逃げて
参りました時小学校は猛火につつま
れて居りました。其の時先生方は五
人焼死なさいました。其の時の岡田
校長は御真影を守る責任感から湯呑
一つを頼りにくずれたはりの中を這
い出し御真影を守りぬかれました。
私達の受持ちの掬川先生は焼出され
た生徒の家を一軒一軒たずねられ級
の者が一人も死亡せず無事だったの
を涙を流して喜んで下さいました。
以下略

昭和四年九月一日震災記念碑を設
立、芝増上寺大僧正を請じ除幕式を
行う。



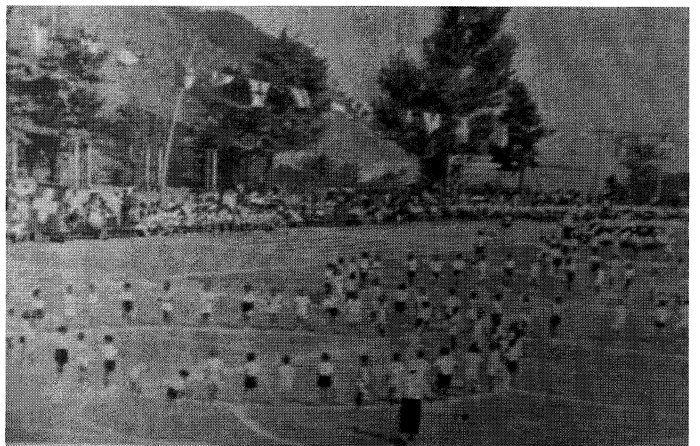
関東大震災 記念碑

◎母校の思い出

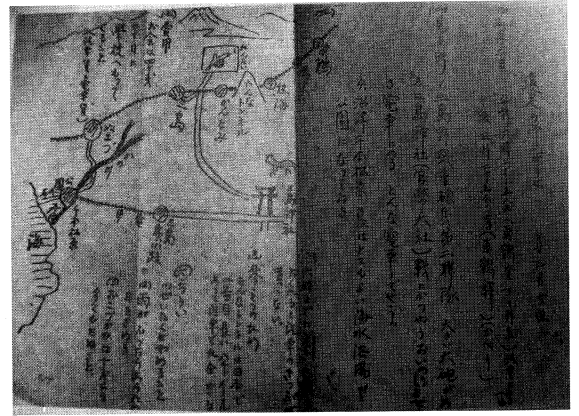
昭和五年十月三十日忠孝碑の除幕
式及教育勅語発布四十周年記念式典
十一月二十六日豆相地震、学校周囲
の石垣殆ど崩壊。

岡本 好江（昭和六年卒）
花模様（もよう）のししゅうのビロードの力
バンを肩から下げて、学校にかよ
いました。かばんの中には、今では使
われていない石板や木製の筆入れが
入れてありました。……以下略

昭和十二年三月十九日児童給食開始



昭和14年 運動会



遠足 尋三（尋常小学校3年）
男・女組 昭和15年

5 真鶴国民学校時代

昭和十八年九月六日全町軍官民合同警備召集演習のため児童登校停止、町内別に大平山に退避。

昭和十九年五月十二日青年学校独立、開校式挙行。

昭和十九年六月十六日山菜採集のため五年生以上大平山へ出動。

昭和十九年九月二十日少年科学研究隊組織。

昭和十九年九月二十日少年科学

◎国民学校時代の思い出

露木時男（昭和十八年卒）

―前段略―特に太平洋戦争が勃発した昭和十六年（初等科四学年）になると教科および科目の構成や名称が



全校水泳（昭和41年）

大きく変り、国民科、理数科、芸能科、実業科などの名称がみられる。そして海国男子を練成する水泳訓練、真冬に素足で霜をふむ体操授業、少年団の編成と小国民活動、植作物繊維獲得のための「からむし」取り、それに日の丸行進曲を聞いて、入賞への血潮を燃やした運動会など
が思い出される…以下略…

昭和二十年八月七日 米小型機来襲校舎の一部に機銃を受ける

6 真鶴町立真鶴小学校時代

（昭和二十二年～現在）

昭和二十二年十月二十九日軍政部クルック少佐、学校視察

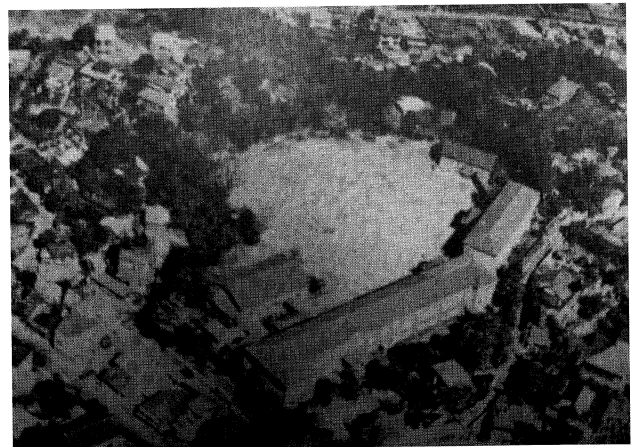
昭和二十三年八月二十三日軍政部係官ミス・フランク来校、教育委員法に関する指導講習会を開催。

昭和二十九年四月三日真鶴築港復旧祭のため全校児童旗行列に参加。

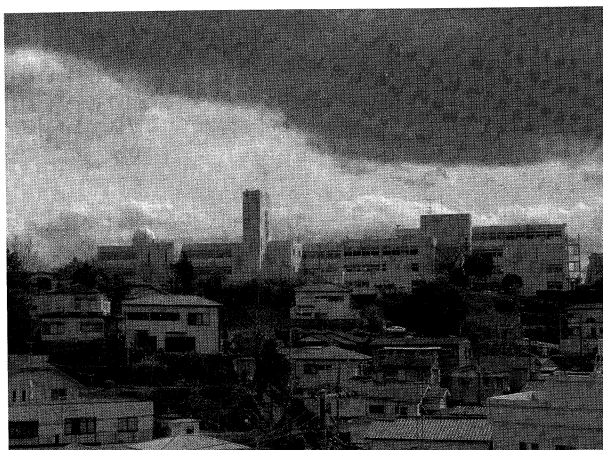
昭和三十年十月二十六日国体旗歓迎三年生以上参加、三十日国体マ

スゲーム六年男女九十九名参加

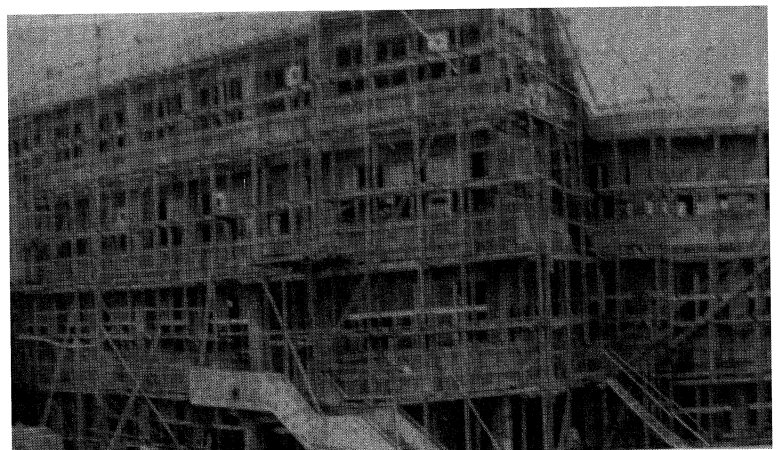
昭和三十年十月二十六日国体旗歓迎三年生以上参加、三十日国体マ



航空写真（昭和41年）



現在の真鶴小学校（平成25年）



着々と進む建設工事（工期昭和48年～49年）

県外視察報告

一月三十一日
静岡県伊東市

今年度も昨年度同様、静岡県へ視察に行ってきました。

静岡県伊東市には、真鶴と同じく江戸城築城に係る石丁場遺跡があります。

・宇佐美石丁場遺跡(伊東市宇佐美)



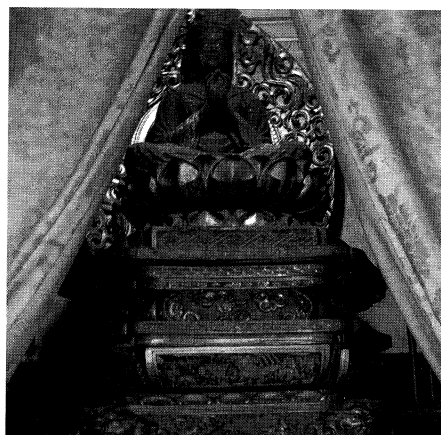
現在この遺跡は周遊コースとして市が整備・管理しており、観光資源として活用されていました。

また、その他にも様々な文化財が保存、管理、活用されておりました。

・花岳院の本尊

静岡県指定重要文化財

『宝冠阿弥陀如来像』



・伊東市文化財管理センター



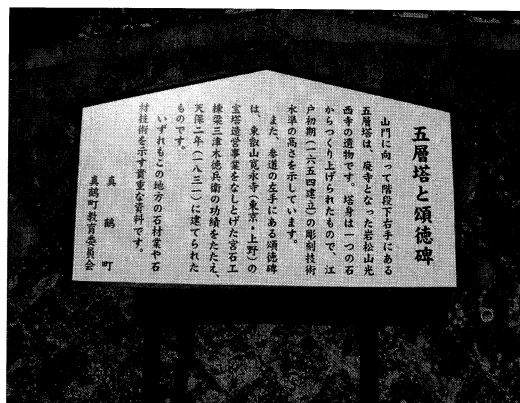
故湯本満様のご冥福を祈って

町文化財審議委員の委員長を務められ、『郷土真鶴 歴史ノート』などの著書の発行も行い、町文化財行政に多大な貢献をされていた湯本満様が平成二十四年七月十二日、永眠されました。(八十六歳)

後日、ご遺族の湯本直子様より、文化財行政に役立てるためにと、金十万円をご寄贈いただきました。

この寄附金は、故湯本満様の生前のご遺志を尊重し、瀧門寺「五層塔と頌徳碑」の案内板の修繕に活用させていただきました。

ここに、紙面をお借り致しまして、湯本直子様には厚く御礼申し上げますとともに、故湯本満様のご冥福を心よりお祈り申し上げます。



「五層塔と頌徳碑」案内板

平成二十四年度文化財保護事業

◎文化財広報啓発事業

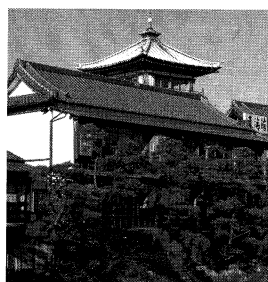
・文化財だより二十六号発行

・町民センター・民俗資料館展示事業
各施設での企画展示を実施

◎文化財審議委員調査研究事業

一月三十一日

静岡県伊東市への視察研修を実施



東海館 外観

◎文化財審議委員協力事業

・教養講座くすのきゼミ

講師 文化財審議員 小野間 松男

十月四日・十月二十四日開催

「頼朝船出までの道のりを訪ねて」

